

# 問題行動を起こす児童に関する協働プロセス

一時保護所保育士と心理職の2者間の困難を中心に

井上博章

(神奈川大学大学院 人間科学研究科 人間科学専攻 臨床心理学領域)

The Collaboration Process for Children Who Have a Problematic Behavior  
-Focusing on Distress between Nursery Teachers and Psychologists in  
Temporary Child Custody Centers-

キーワード：他職種、協働、一時保護所、保育士、心理職、プロセス

## 【問題と目的】

一時保護所では、職員の体制上の問題や、入所児童が混合処遇であるため、職員は疲弊した毎日を過ごしていることがわかる。そのような一時保護所において、改善案が出されたが、一時保護所内での他職種の協働の必要性は上げられておらず、さらに一時保護所研究は数少ないことがあげられる。そのため一時保護所の協働に関する研究を行うことが先行研究上から課題としてあげられることである。

また、他職種との協働の中でも、一時保護所保育士と心理職の協働が難しいことが考えられた。集団を見ている保育士と個別を見ている心理士、協働を行ってはいるものの、一時保護所内での2職種間の協働がどのようにして行われているかの研究は見られない。

以上のことから本研究の目的は、2つである。

- ①：一時保護所保育士と心理職の職種の立場から、問題行動を起こす児童に関する協働プロセスを明らかにし、その中の一時保護所保育士と心理職が抱える困難を見出していくことである。
- ②：目的①で現れたプロセスモデルから、一時保護所心理職として一時保護所保育士と協働を行っていく上で果たすべき課題や将来の方向性についていくつかの示唆を得ることである。

## 【方法】

### 研究対象者1 研究対象者2

研究対象者1は、児童相談所一時保護所に勤務している、a施設から4名、b施設、c施設、d施設からそれぞれ1名ずつ、計7名の保育士を対象とした。

研究対象者2は、児童相談所一時保護所に勤務している、a施設、b施設、c施設、d施設からそれぞれ1名ずつ、計4名の心理職を対象とした。

## 調査期間

調査は令和元年8月から9月にかけて行った。

## 調査方法

調査は、半構造化面接によるインタビューを実施した。実施は、予め研究者の指導教授より、a施設、b施設、c施設、d施設の保護所の児童相談所所長宛てに依頼文を提出し、許可を得てから行った。その際、面接場所についての施設利用の許可を得た。調査は各施設係長に保育士を選定していただき、それぞれの保育士の都合に合わせて行った。面接時間は30分から1時間30分とし、面接場所は各保護所内での空き部屋で行った。

## 調査内容

保育士、心理士に対して、面接内容はインタビューガイドに従って、半構造化面接を行った。

なお、インタビューの内容は承諾を得てからICレコーダーに録音した。

## 装置

三洋電機株式会社製 IC RECORDER: ICR-PS503RM を使用した。

## 分析方法

インタビュー内容は、協力者の許可を得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。データ分析は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（木下，2003；Modified Grounded Theory Approach：以下，M-GTA）に基づき実施した。

分析1では、分析テーマは問題行動を起こす児童に関する協働プロセスとし、分析焦点者は一時保護所保育士とした。

分析2では、分析テーマは問題行動を起こす児童に関する協働プロセスとし、分析焦点者は一時保護所心理士とした。

## 分析手順

分析の手順は、まずインタビューした内容から逐語録を作成し、逐語録を熟読した。分析テーマと関連の強い文脈に注目し、データを説明する概念を生成した。そして、データ分析が恣意的に進まないように、継続的比較分析を行った。次に、生成された複数の概念間の関係性からサブカテゴリーを生成した。次のサブカテゴリー間の関係性からさらなるカテゴリーを生成した。生成された概念、サブカテゴリー、カテゴリーを構成要素とする結果図ならびにストーリーラインを作成した。

なお、本研究では週に1、2回、2時間程度の研究指導を受けることで、質的研究の信用可能性を確保していた。また、解釈、定義、概念名がデータに密着しているかの検討を繰り返し行った。

## 倫理的配慮

本研究は、神川大学人間科学部倫理委員会の審査を受け承認を得た（2019-5）。

## 【結果と考察】

### 分析1 保育士

まずは、保育士にインタビューを行い、分析した結果、43の概念と6つのカテゴリー、10のサブカテゴリーが生成された（付録参照）。最終的に33の概念を採用した。カテゴリーは《 》、概念は【 】, カテゴリーの定義は〈 〉で示した。概念の【 】, には番号を振っているが、通し番号ではなく、付録から分析ワークシートを参照できるように概念番号を振った。

#### モデル図（図1）の概要

まず始めに問題行動を起こす児童に対応する保育士は《困難を抱えるまで》の過程を経る。この過程では、心理職との協働は行われず、保育士は児童との関わりの中で、その対応の困難や体制上の困難を抱える。そして次の《保育士の困難が生まれる》過程に至る。この過程では、問題行動を起こす児童だけではなく、その他の児童に対する申し訳なさを感じつつも、問題行動を起こす児童に対し、どのような対応をすればいいのだろうかといったアドバイスを求めようとする。そのような困難を抱えた保育士に対し、《心理職の関わり》が行われる。ここで初めて保育士と心理職の協働が行われる。関わりを経ることで、保育士は心理職との《協働体験》として、いらだちや助かり感を感じる。そうした気持ちが保育士に心理職との協働を行う上でのイメージを作っていく。イメージを抱えた状態で再度《最初の困難が生じるまで》の過程に戻る。しかし、心理職に対するイメージがマイナスなイメージを保育士が体験している場合、《いらだちから生じる思い》を経て、最初の過程に戻る。このように、《最初の困難が生じるまで》から《協働体験》までの過程を繰り返していく中で、保育士は心理職に対する協働の内的なイメージである《協働意識》を獲得する。

### 分析2 心理士

一時保護所心理士にインタビューを行い、分析した結果、37の概念と4つのカテゴリー、10のサブカテゴリーが生成された（付録参照）。最終的に36の概念を採用した。カテゴリーは《 》、概念は【 】, カテゴリーの定義は〈 〉で示した。概念の【 】, には番号を振っているが、通し番号ではなく、付録から分析ワークシートを参照できるように概念番号を振った。

#### モデル図（図2）の概要

始めに、心理職は問題行動が起きた際と、普段の関わりを行き来する《心理職の関わり》を行っている。そのうち、問題行動が起きた際の関わりの中には、児童対応の困難と保育士に理解を伝えたいことがあるにもかかわらず、なかなか理解されない保育士との困難へと続いていく。心理職は各一時保護所に1名しか配置されておらず、そこでは孤立感を感じる。それでも保育士との協働を行わなければならず、《保育士との協働に対する現実的な葛藤》を抱えたまま、最初の《心理職の関わり》に戻る。保育士との現実的な葛藤を繰り返す中で、心理職は次に【37 自身が心理的な側面に固執しているという気づき】のような《心理職としての内省をすることで得られる気づき》を得る。しかし、自分が心理職としての知識や経験を持っているという【30 心理職の自負】との間に《心理職の内的な葛藤》が生じ

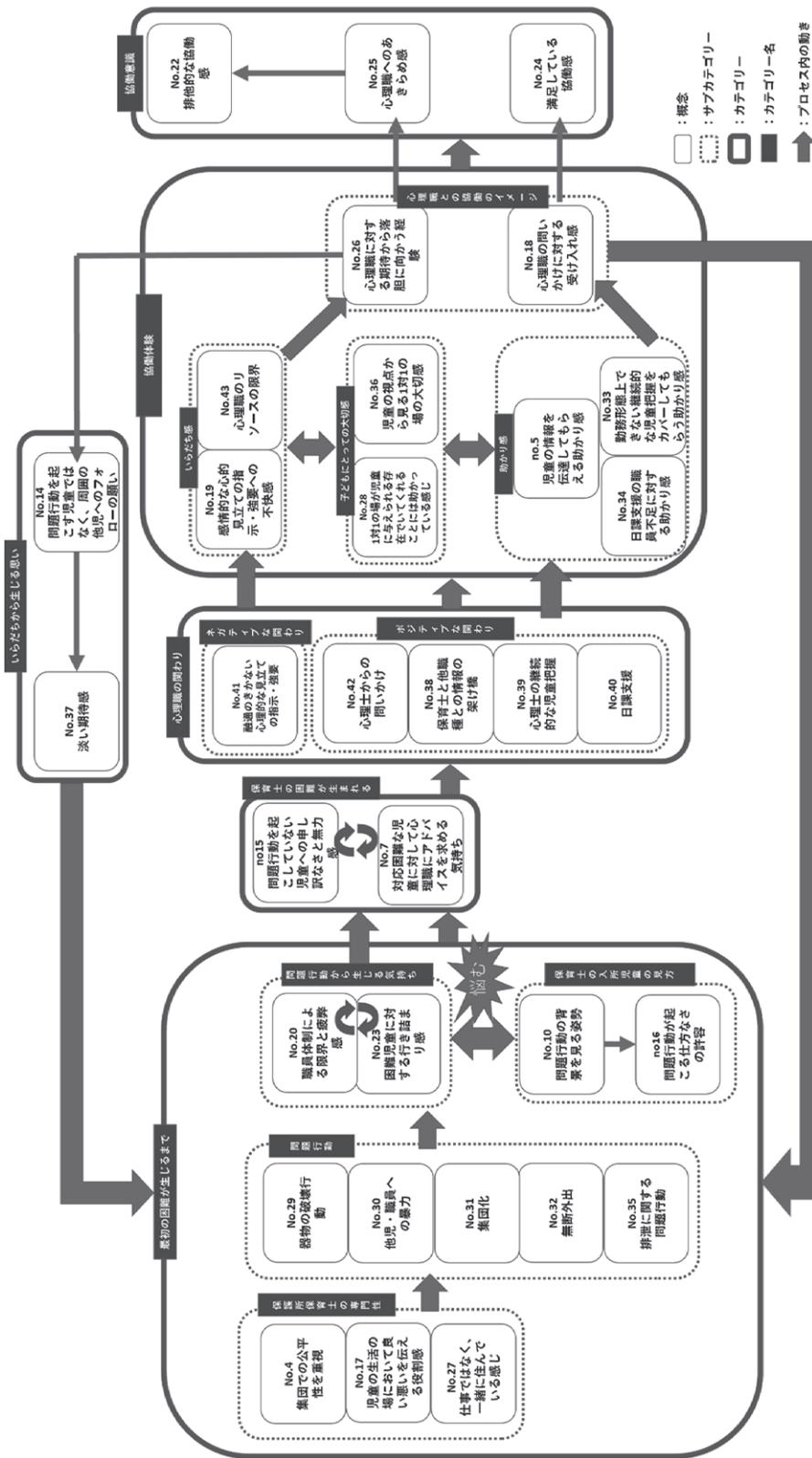


図1. 一時保護所保育士の困難を中心にとらえた、一時保護所保育士と心理職の問題行動を起こす児童に関する協働プロセスモデル図

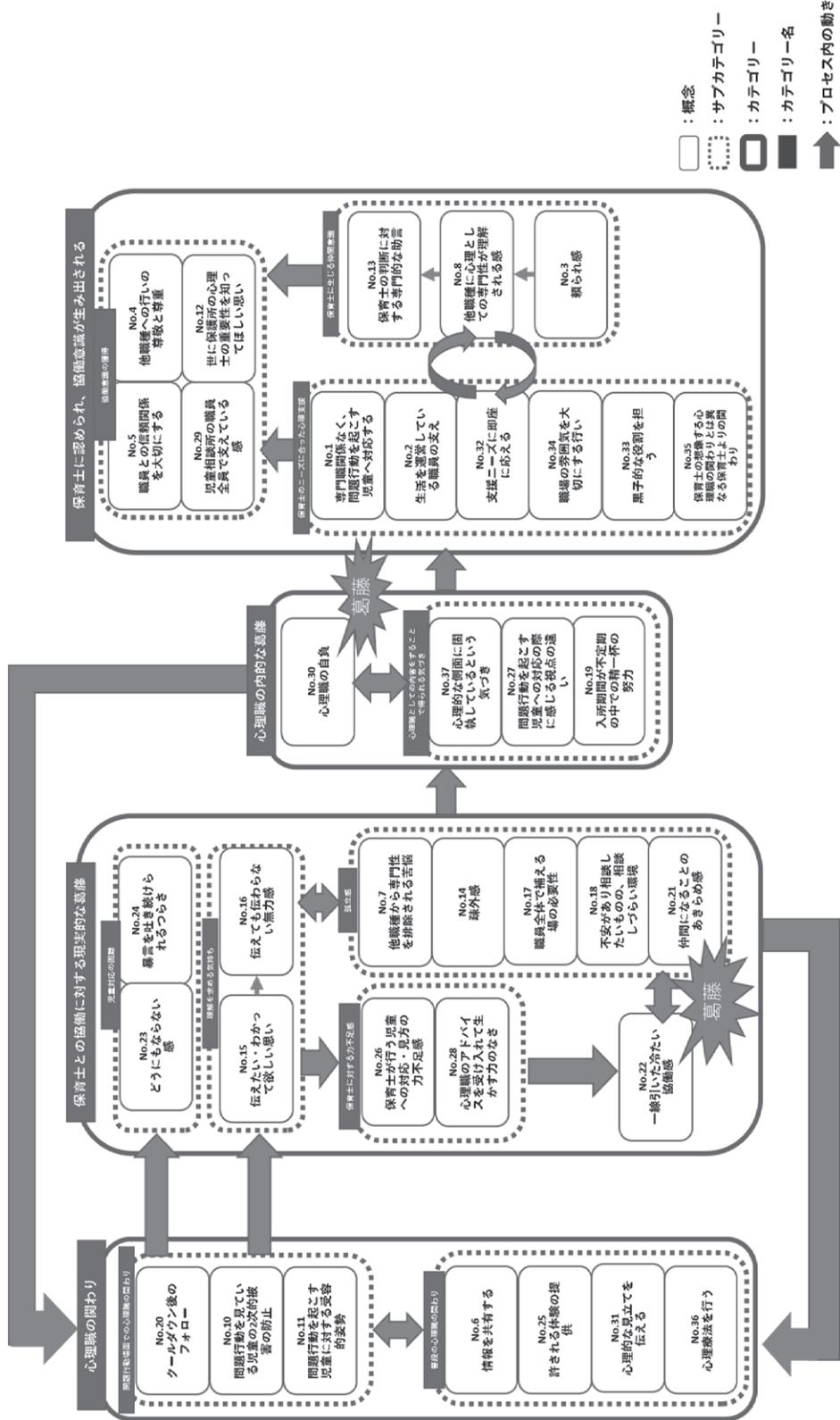


図2. 一時保護所心理職の困難を中心にとらえた、心理職の視点から考えられた心理職と保育士との問題行動を起こす児童に関わる際の協働モデル

る。そうした葛藤を抱えたまま、再度最初の《心理職の関わり》に戻る。こうした葛藤を繰り返していくうちに、心理職の関わりに変化が生じる。新たな心理職の関わりは、保育士のニーズにあっていないため、保育士は心理職のことを自分たちの仲間であると認識する。そうして、《協働意識の獲得に》つながる。このような《保育士に認められ、協働意識が生み出される》過程を最終的に心理職は、問題行動を起こす児童に関する協働の際に至る。

### 【総合考察】

本研究で明らかとなった最も重要な点は、一時保護所心理職が内省を行い、入所期間が短い中、精一杯努力している自分を見つめ、それでも心理視点に偏りすぎた見方をしているということに気づき、心理職として心理的な知識を持っているという自負との葛藤を乗り越えることが重要であることが見出されたことである。Reese. & Sontag. (2001) は、他の職種に対する尊敬と敬意を払うことが協働していく中で生じる問題を改善するための方法であると述べている。ほかには、徳田 (2017) は、教職員との連携・協働関係を構築する際、多くのカウンセラーが「教わる姿勢」、「ニーズの把握」、「相手を尊重する」などのほかに11つのポイントを活用している点が明らかになった。また、坂本 (2018) は心理臨床家が有効な協働的支援を展開するためには、『同僚や他職種はそれぞれの立場から懸命に支援を行っているとの前提に立ち、尊敬と感謝の気持ちを持ってかわること』、『心理臨床的な価値感にもとづくものの見方や考え方を絶対視せず、他職種の困り事を（個別的支援においてクライアントにするのと同じく）共感的に理解しようとする』ことが重要であると述べているように、《保育士に対する力不足感》を感じている段階では、相手に対する尊敬や尊重はできないため、相手の批判を行うのではなく、まずは自分を見つめ、謙虚な姿勢で相手の支援ニーズにあった《ポジティブな関わり》と捉えられる《保育士のニーズに合った心理支援》を行えるようになることが重要であることが推察された。

### 【結論】

保育士からみた困難プロセスにおいては2つのストーリーラインが見出された。1つは冷たい協働感につながり、一方は満足のいった協働感につながるものが明らかとなった。さらに、心理職の相手のニーズを理解せずに発する助言には、冷たい協働感につながる可能性が示唆された。また、協働を行っていく上での困難は、児童対応による困難と心理職からの助言による困難といった2つの困難があることが明らかとなった。

心理職は実際の協働を行っていくうえで、保育者との葛藤を抱え、乗り越えると、次には心理職自身の内的な葛藤があることが明らかとなり、その2つの葛藤を乗り越えることで、ようやく心理職は保育士に対し、ニーズに合った心理支援を行うことができ、認められ、心理的な知見からの助言ができるようになることが見出された。

これらのことから、問題行動を起こす児童に関する協働を保育士と心理職が行っていく上で、心理職が果たすべきこととして、①保育士の困難を理解し、支援ニーズに対し、具体的

な関わりを行うこと, ②職場の孤立感を感じつつも, その中で謙虚な姿勢で居続けること, ③自身の関わりが本当によかっただろうかといった内省をする習慣をつけることが考えられた。

#### 【引用文献】

- Reese, D. J. & Sontag, M. A. (2001). Successful interprofessional collaboration on the hospice team. *Health & Social Work*, 26,167-175.
- 徳田智代 (2018). 学生相談カウンセラーと教職員との連携・協働関係構築の工夫. 久留米大学心理学研究, 17, 71-77.
- 坂本憲治 (2018). 心理臨床家の組織における協同的支援態度尺度 (CAS-O) 作成の試み. 福岡大学人文論叢, 50, 1-24.